

社会認識教育における学習評価システムの開発研究(I)

——論述式問題に対する解答の多様性と問題作成の課題——

棚橋 健治 片上 宗二 栗谷 好子 岡崎 誠司
児玉 康弘 高田 準一郎 樋口 雅夫
(協力者) 松田 浩一

I 問題の所在

本研究は、大学入試問題を中心とする論述式テスト問題の分析を通して、社会認識教育の学習評価における論述式問題の具体的な作成方法とその利用方法を明らかにすることを目的とする。

評価は、その妥当性、信頼性が高いことが求められる。すなわち、その問題に答えさせることによって、判定しようとする子どもの学習成果がまさに測れるということ、そして、それは異なった条件下でも安定的に測れるということが求められる。従来、いわゆる客観テストはこのような要求を比較的満たしやすいとされてきた。それに対して、論述式問題は採点者の主観のはいる余地が大きいことが問題視され、その作成・利用方法を客観化する努力はあまりなされてはこなかった。しかし、体系的な知識群の獲得およびその構造化の成否、概括や個別化あるいは因果的説明といった知識間の関係認識の成否を判定するには、子どもの認識をより直接的に表現させることが可能な論述式問題の方が有効であることが多い。

論述式問題は、なぜ採点者の主観のはいる余地が大きいのか、なぜ知識間の関係認識の成否を判定するのに有効なのか。論述式問題を構成する様々な要素は、問題作成者ならびに解答者双方にとってどのような役

割を果たすのか。本研究では、これらの問いを探求することによって、論述式問題の長所を明らかにすると同時にその具体的な作成方法を解明する。なお、本稿は「社会認識教育における学習評価システムの開発研究(II)」と一連のものとして、本継続研究成果の一部をなすものである。

II 論述式解答の多様性の実態

論述式問題は、客観テストに比べて可能な解答の幅がきわめて広いということが、長所であると同時に短所にもなっている。たとえば、「三十年戦争について説明しなさい」と問われたとしたら、解答者は何をどのように答えるべきか、大変悩むことになる。三十年戦争の経緯を答えるべきか、原因を答えるべきか、結果や影響を答えるべきか、あるいはエピソードや裏話を答えるべきか。文字通り、三十年戦争についてであれば、何を答えてもよいことになり、何をどの程度答えるかは解答者に委ねられることになる。

そこで、まず論述式問題に対する解答の多様性の具体的実態と、そのように多様な解答が可能になる理由を考察してみよう。「三十年戦争について述べよ」という問題に対し予想される解答例をいくつか挙げてみよう。

解答例 1

三十年戦争は1618年に起こった。当時、領主の信仰する宗教がその土地の宗教となるという、アウグスブルグの宗教和議に対する不満が満ちていた。ハプスブルク家がボヘミアで旧教化政策を実施しそれに対してボヘミア新教派が反乱を起こし、戦火は一気に拡大した。スペインが旧教徒派として参戦した。その後、デンマークが領土的野心から、イギリスやオランダの援助を得て、ドイツに侵入した。

しかし、傭兵隊長ヴァレンシュタインが率いる皇帝軍がデンマークを破り、北ドイツを制圧した。さらに、スウェーデンがフランスの援助を受けて、新教徒側として参戦した。眠れる獅子と呼ばれたスウェーデン国王グスタフ・アドルフ率いる軍とヴァレンシュタイン率いる軍は激戦を行ったが、グスタフ・アドルフは戦死し、それを契機にフランスが公然と参戦した。フランスは旧教国であったが、ブルボン家宰相リシュリューが、ハプスブルク家との対抗上、新教徒側として参戦するように建言し、そのようにした。新教徒側、旧教徒側とも

に傭兵を用いたが、傭兵達は報酬などの条件によって戦線を離脱したり、敵方に寝返ったりすることもしばしばであった。また、民間人に対して虐殺や略奪行為を働くことも多かった。

戦争は、1648年のウエストファリア条約締結によって終結した。この条約には、フランス、スウェーデン、オランダ、スペイン、神聖ローマ帝国皇帝、ドイツ66国領主、オスマン帝国、ならびにそのほかの非交戦国も参加した。この条約では、フランスは3司教領とアルザス地方を獲得し、スウェーデンはボルメン西部と北ドイツ沿岸地域を獲得した。ドイツ諸侯は、皇帝および帝国に背反しない限り相互に外国との間で同盟を結ぶ権利を認められるなど、それぞれの領土に対して、ほぼ完全な主権を握った。また、スイスおよびオランダの独立が承認された。さらに、支配者の宗教がその土地の宗教となり、アウグスブルクの宗教和議の規定が確認されるとともに、アウグスブルクの宗教和議で認められなかったカルヴァン派が認められた。

三十年戦争の戦場となったドイツでは、各国の傭兵による民間人の殺戮や略奪が行われたこともあって、農村部人口の平均約40%、都市部人口の平均約33%が死亡した。畑や建物なども破壊された。ドイツはバルト海沿岸の港も失った。(960字)

解答例2

三十年戦争はドイツ国内の宗教戦争として始まったが、旧教国フランスがハプスブルク家への対抗上新教徒側を支援するなど、ヨーロッパ各国が自国の国益によって参戦したヨーロッパ史上最初の近代国際戦争であった。(100字)

解答例3

三十年戦争によって神聖ローマ帝国が事実上崩壊し、キリスト教を頂点とする中世ヨーロッパの普遍的権威・秩序は崩壊した。また経済力を持った王権が伸張し、絶対主義体制が成立して、近代市民社会への過渡期となった。(102字)

解答例4

三十年戦争は、アウグスブルクの宗教和議の不備によって起こった新旧両教徒の対立を遠因とし、ハプスブルク家がベーメンの新教徒に対して行った旧教化政策を契機として起こった。このように三十年戦争は、ヨーロッパ史上最大の宗教戦争として始まったが、旧教国のフランスがハプスブルク家との覇権争いのために、新教徒側として参戦したり、ハプスブルク家の支配下にあったスペインが旧教徒側として参戦したり、領土的野心から参戦したデンマークのような国もあり、そして戦後体制を決めるウエストファリア条約の締結には非参戦国も参加するなどして、宗教戦争としての性格は失われ、近代国際戦争の様相を呈した。(287字)

解答例5

三十年戦争は、戦場となったドイツ国土の荒廃を招いた。ドイツでは参戦した各国の傭兵達が略奪や虐殺を行い、著しい人口減となるとともに、畑や建物も破壊されて生産力が低下した。また、政治的にも分裂し、政治、経済、社会などの面において、西欧諸国に著しく立ち遅れることになった。他方、戦後体制に関わるウエストファリア条約では、ドイツ諸侯が、皇帝および帝国に背反しない限り各々外国との間で同盟を結ぶ権利を認められるなど、各々の領土に対するほぼ完全な主権を獲得したり、スイスおよびオランダの独立が承認されたりして、平等な領域国家が独立の政治単体として並存する主権国家体制が確立した。また、三十年戦争中の傭兵の行動に対する反省などから、戦争中にも守られるべき法があるという意識が高まり、グロティウスの『戦争と平和の法』などもあって国際法理論の体系かがなされた。このようにして新たな国際秩序（ウエストファリア体制）が形成され、その後のヨーロッパの国際政治を規定する枠組みとなった。(431字)

解答例6

三十年戦争の結果、ドイツ諸侯は各々、外国との同盟を結ぶ権利を認められる一方、皇帝は戦争や講和に関する事項について帝国議会の決定に従うことになった。諸侯の主権が承認されたドイツは、連邦国家体制となり、神聖ローマ帝国は事実上崩壊した。これにより、ローマ教皇を頂点とする中世ヨーロッパの秩序が崩れた。(148字)

これらの解答に見られる多様性とは、どのようなものであろうか。

第一に、一見して気付くことは、解答文字数の相違である。解答例1が960字と最も多くは、以下解答例5の431字、解答例4の287字、解答例6の148字、解答例3の102字となり、最も少ないのは解答例2の100字である。

第二に、解答例1、2および3を比べると顕著であるように、述べられている内容の具体性・抽象性に相違がある。解答例1においては、三十年戦争の具体的な展開が時間軸に沿って詳しく述べられているが、解答例2では、具体的な展開はほとんど述べられておらず、かわりに三十年戦争の性格付けが述べられている。さらに解答例3は、解答例2よりも一層抽象度が高まり、三十年戦争自体の性格付けを越えて、歴史におけるこの時代の位置づけを論じている。それらに対して、解答例4、5および6には、具体的な描写もそれらの性格付けも両者ともに盛り込まれている。

第三に、解答例4と解答例5と解答例6のように、具体性・抽象性では差がないが、述べられている側面が異なるものもある。解答例4では、三十年戦争の宗教戦争から近代国際戦争へ変質という側面に重点を置き、それを具体的な事象を交えて説明しているのに対して、解答例5では、三十年戦争の結果として新しい国際秩序が確立したという側面に重点を置き、それを具体的な事象を交えて説明しており、解答例6では、三十年戦争が神聖ローマ帝国の分裂につながったとい

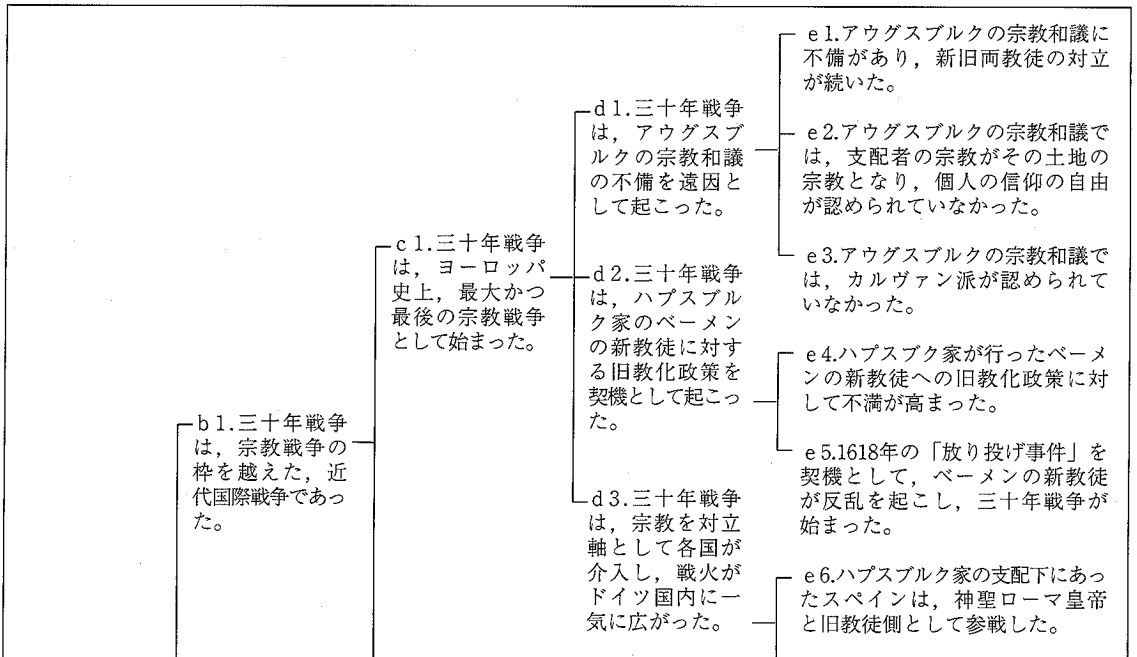
う側面に重点を置き、それを具体的な事象を交えて説明している。

では、「三十年戦争について述べよ」という問いに対する解答は、なぜ、このような多様なものになりうるのであろうか。

Ⅲ 論述式解答の根拠となる知識の構造

問題で扱われる事象について、解答者の頭の中には様々な知識が成立している。「三十年戦争について述べよ」というような問いでは、説明を求めている対象事象を「三十年戦争」と限定しているだけで、それ以上の限定は加えていない。したがって、三十年戦争について解答者の頭の中に成立しうる知識のどれを用いて文章を構成してもよいことになる。三十年戦争という歴史的事象について成立しうる知識には、様々な質と領域がある。解答者は、それらの知識の中から、様々な限定条件に合致する知識を選択して文章を作成することになるが、「三十年戦争について述べよ」という問いのように、限定条件がない場合、解答者によって選択される知識の質と領域の相違が、解答の多様性を生み出しているのである。

したがって、論述式解答の多様性には規則性があるのであって、単に解答者によってバラバラだということではない。多様な解答も類型化できる。そのためには、問われている事象に対して成立しうる知識を構造化する必要がある。図1は、三十年戦争に関して成立しうる知識の構造を示したものである。



a1.十字軍の失敗やルネサンスの興隆などにより、中世約1000年にわたって通用したキリスト教を頂点とする中世的な普遍的権威・秩序は崩壊した。また、封建社会の変化により、封建領主による政治支配は、経済力を持った王権のもとに統一され、近代市民社会への過渡期である絶対主義体制が成立した。近代国家が成立し、時代は中世から近代へと移行した。

b2.ウエストファリア条約締結(1648年)によって、新たな国際秩序(ウエストファリア体制)が確立した。

c3.ウエストファリア条約により、互いに平等な領域国家が、独立の政治単体として並存する主権国家体制が確立した。

c4.「国際法」が生まれ、国際秩序の基礎ができた。

c2.三十年戦争は、最終的には宗教戦争としての性格を失い、ヨーロッパ史上最初の近代国際戦争に発展した。

d4.三十年戦争には、各国が利益によって参戦した。

d5.三十年戦争は、ハプスブルク家とブルボン家の覇権争いの場となった。

d6.三十年戦争の戦後体制に関わるウエストファリア条約には、参戦国だけでなく、非参戦国も参加した。

d7.ウエストファリア条約によって、互いに領土と主権を尊重し、内政には干渉しないことが了解された。

d8.各国とも忠誠心の強い自国の常備軍の必要性を感じ絶対王政への心理的土壌となった。

d9.国際法理論が体系化され、戦争中にも守られるべき法があるとされた。

e7.新教国のデンマークは、オランダ、イギリスの支持を得て、領土的野心から新教徒側として参戦した。

e8.スウェーデンが、フランスの援助を得て、新教徒側として参戦した。

e9.旧教国のフランスが、ハプスブルク家との対抗上、新教徒側として参戦した。

e10.フランスでは、ブルボン家宰相リシュリユーが、ハプスブルク家との対抗上、新教徒側として参戦するよう建言した。

e11.フランスは、新教国のスウェーデンを支援した。

e12.戦後体制を決める会議には、フランス、スウェーデン、オランダ、スペイン、神聖ローマ帝国皇帝、ドイツ66国領主、そのほかが参加した。

e13.オスマン帝国が、戦後体制を決める会議に参加した。

e14.フランスは3司教領とアルザス地方を獲得した。

e15.スウェーデンは、ボルメン西部と北ドイツ沿岸地域を獲得した。

e16.ドイツ諸侯は、皇帝および帝国に背反しない限り、各々外国との間で同盟を結ぶ権利を認められるなど、それぞれの領土に対して、ほぼ完全な主権を握った。

e17.スイスおよびオランダの独立が承認された。

e18.支配者の宗教がその土地の宗教となり、アウグスブルクの宗教和議の規定が確認された。

e19.アウグスブルクの宗教和議で認められなかったカルヴァン派が認められた。

e20.各国に雇われた傭兵は、民間人に対して、略奪や虐殺を行った。

e21.仕事を失った傭兵が強盗になることが多かった。

e22.グロティウスが『戦争と平和の法』を著した。

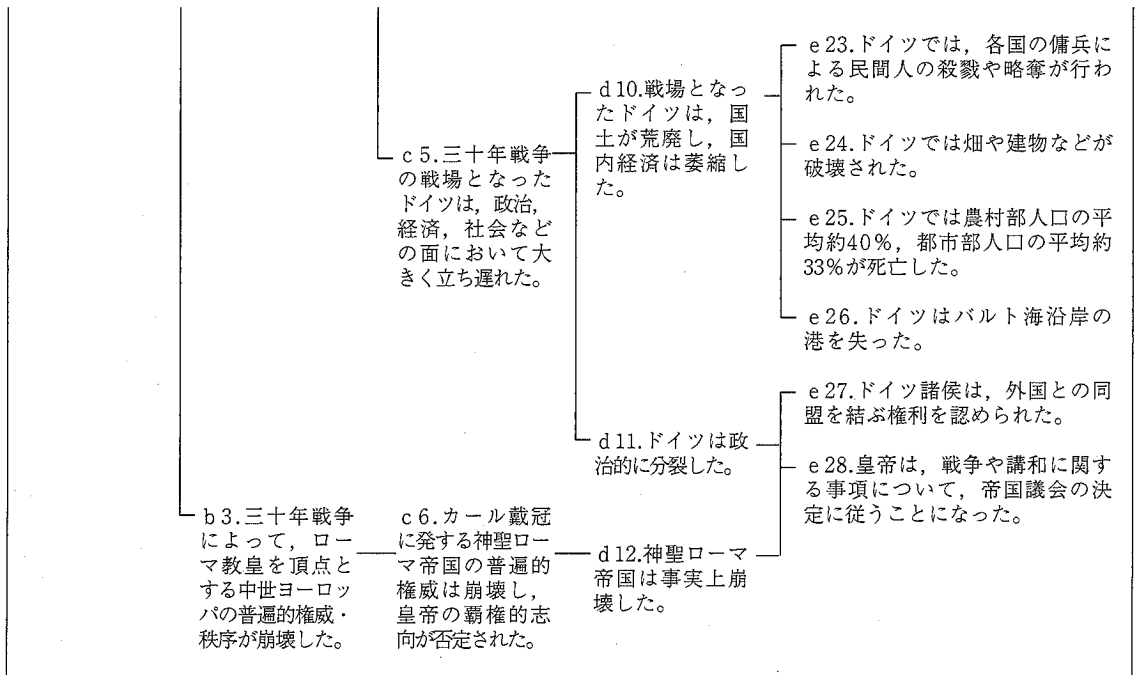


図1 「三十年戦争に関して成立しうる知識の構造」^{註)}

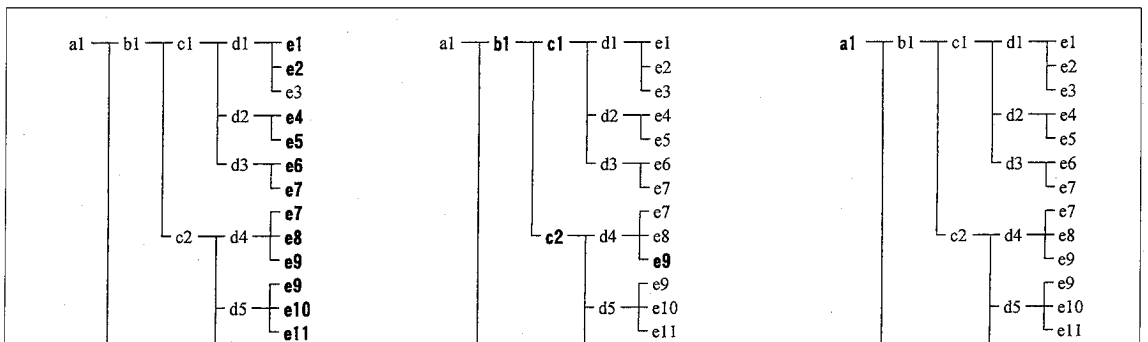
この構造図は、横方向は知識の質の相違を表現し、縦方向は知識の領域の相違を表現している。図を横方向に見ると、大きく5つの知識群に分かれている。すなわち a, b, c, d, e の各群である。これらは右へ行くほど、より具体的で個々の事象に密着したものになり記述的なものになる。左へ行くほど、より抽象的で多くの事象が包含される一般的なものになり説明的なものになる。e の知識は、三十年戦争に関わる具体的な事象を記述しており、a の知識は、中世から近世への移行という大きな時代の構造を説明している。

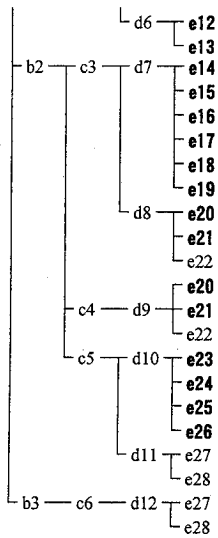
図を縦方向に見ると、大きく3つの知識群に分かれている。すなわち b1 に統括される知識群 (c1 ~ 2, d1 ~ 6, e1 ~ 13)、b2 に統括される知識群 (c3 ~ 5,

d7 ~ 11, e14 ~ 26)、b3 に統括される知識群 (c6, d12, e27 ~ 28) である。b1 に統括される知識群は、三十年戦争の経緯と本質を説明しており、b2 に統括される知識群は三十年戦争によって新たに成立した国際体制を説明することによって、三十年戦争の結果が国際秩序に与えた影響を説明している。そして、b3 によって統括される知識群は、三十年戦争の結果が中世を規定する宗教権力に与えた影響を説明している。

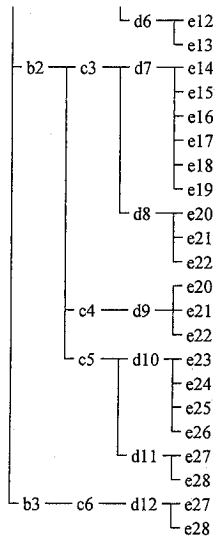
IV 論述式解答の類型

先に紹介した解答例で用いられている知識を、この構造図の中に求めて位置づけると、各解答例が三十年戦争をどのように説明しているのかが明確になる。

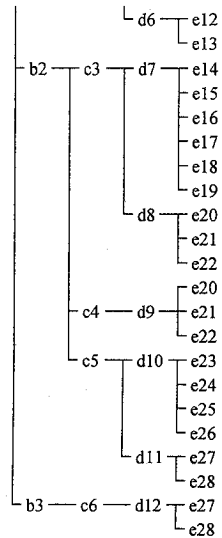




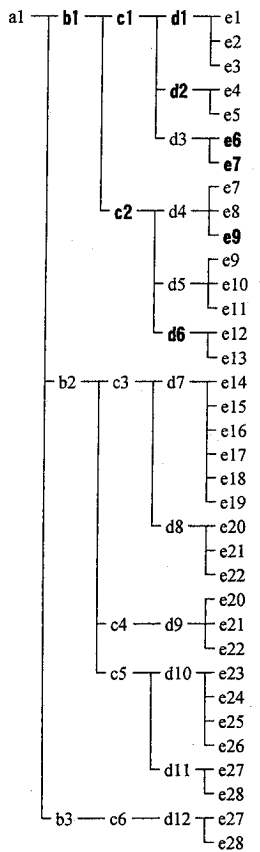
<解答例 1>



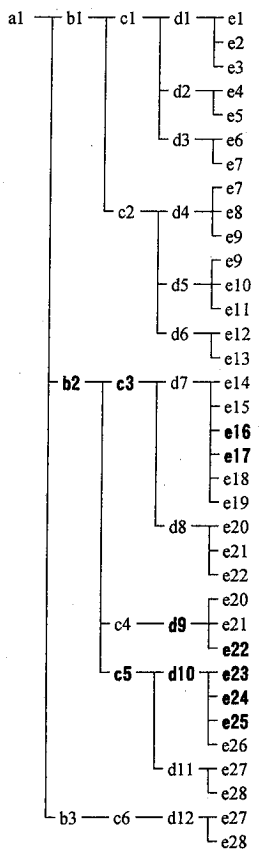
<解答例 2>



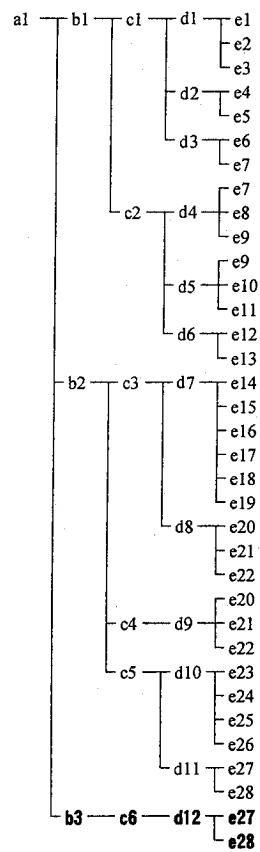
<解答例 3>



<解答例 4>



<解答例 5>



<解答例 6>

太字で示した部分の知識が、各解答例で用いられた知識を示す

図2 「三十年戦争に関する論述式解答で用いられた知識の構造」

この図から、論述式解答の多様さの規則性が明らかになる。そして、それは論述式問題を開発する際の課題を示唆している。

論述式解答が多様なものになる理由は、何らかの限定条件が付けられていない場合、知識の構造図の横方向すなわち解答に用いる知識の質の選択と、縦方向すなわち知識の領域の選択において解答者の自由な判断が許されることにある。したがって、多様な解答も、このような横方向と縦方向における解答者の知識選択の視点から分類できる。

1. 解答に用いる知識の質の選択によって生じる多様性

構造図を横方向で分類すれば、①個別的知識を主に用いて具体的な対象事象を記述する解答、②対象事象に比較的密着して、その事象の構造を説明する解答、③対象事象の構造説明を踏まえて、より一般化して時代や社会の構造を説明する解答、④これら①、②、③の知識に跨って事象を説明する解答、に大別できる。

①はeの知識を中心に構成される。説明が求められている三十年戦争という歴史的事象の経緯（直接的な契機、闘いの展開、戦後処理など）を、具体的な事実のレベルで記述することになる。この問題のように、歴史の場合、時間軸に沿った展開の説明になることが多い。解答例1がその典型である。

②はd、cおよびbの知識を中心に構成される。これらの知識は、三十年戦争の個々の事実を解釈したものであり、eで示された具体的な記述内容を説明できるような一般化された知識である。説明対象となっている事象の構造を分析することによって得られる知識であり、事象の具体的事実間の関係を説明したり、その事象の本質を規定したりする。解答例2がその典型である。歴史的事象の説明において原因や結果を述べる場合、時間軸に沿って、より前に起きた事実を原因として述べ、より後に起きた事実を結果として述べる解答も多いが、それはeの知識を順番に並べているだけで、前の事実がなぜ後の事実を引き起こしたのかの説明にはなっていない。d、c、bの知識によって、eの知識の関係や意義が明らかになる。

③はaの知識を中心に構成される。この知識は、直接、説明が求められている三十年戦争という歴史的事象の説明よりも、その事象をより大きな社会あるいは歴史の中に位置づけ、そのような大きな社会や歴史の構造を説明するものである。解答例3がその典型である。この解答例は、三十年戦争の説明を求める問いに対して、三十年戦争自体の経緯や構造にはほとんど言及せずに、三十年戦争というひとつの歴史的事象を

通して、中世から近世への時代の大きな変化を説明している。

④は、e、d、c、bそして時にはaまで含めた知識で構成される。三十年戦争の具体的事実を記述しながら、それらをより一般的レベルで説明したり、逆に、三十年戦争の構造や本質を説明しながら、適宜、具体的な事実を例として挙げたりする説明である。解答例4、5および6がその典型である。

2. 解答に用いる知識の領域の選択によって生じる多様性

構造図を縦方向で分類すれば、説明が求められている事象について成立しうる知識の領域によって様々な分類が可能になる。例として取り上げた「三十年戦争」の場合、3つの領域に分けることができる。すなわち、㉞三十年戦争が宗教戦争から近代国際戦争へ変質したことに焦点を当てて説明する解答、④三十年戦争が結果として新しい国際秩序を確立したことに焦点を当てて説明した解答、㉟三十年戦争が神聖ローマ帝国の事実上の崩壊を招いたことに焦点を当てて説明した解答である。㉞の解答の典型は解答例4、④の解答の典型は解答例5、㉟の解答の典型は解答例6である。

一般的には、ここで取り上げたような歴史的事象の場合、「原因に関連する知識群を用いた説明」「経過に関連する知識群を用いた説明」「結果や影響に関する知識群を用いた説明」「性格規定や歴史的意義に関する知識群を用いた説明」といったような領域がある。また、歴史的事象以外の社会的事象においては、「構成に関する知識群を用いた説明」「機能に関する知識群を用いた説明」「他の事象との関係に関する知識群を用いた説明」「性格規定に関する知識群を用いた説明」といったような領域がある。しかし、いずれも説明が求められる事象自体に固有の内容によって様々なものになる。

V 論述式問題の開発の課題

1. 解答に用いる知識の限定の指示がない問題の意義

「三十年戦争について述べよ」という問いに対する解答としては、これらの解答例は、すべて正解としなければならない。説明すべき対象事象のみを提示して、何の限定も加えないこのような論述式問題は、比較的多く出題されている。たとえば、「日露戦争について述べよ」、「高松塚古墳の壁画について述べよ」といった問題が見られる。また、解答文字数の制限のみをつけた出題も多い。たとえば、「日本の国際連盟脱

退について100字以内で説明せよ」「惣領制について50字以内で説明せよ」「延久の荘園整理令について、100字以内で述べよ」などがある。さらに、説明を求める事象が含まれる文章を提示し、その中の一部に下線を付して、その事象を説明させるという形の問題は多数見られる。

「この問題なら、このような答えも書けるし、あのような答えも書ける。どちらの答えを書いても間違いではないが、さて、一体どちらを書けばよいのだろうか。」解答に用いる知識の限定のない論述式問題を解くにあたって、解答者が迷うところである。構造図に書き表すことのできる知識すべてを組み込んだ解答を書くことができれば、問題はない。2000字以上の小論文やレポートであればそれが求められていると判断できよう。しかし、入学試験をはじめとする通常のテストの場合、100字～600字程度の字数制限が加えられることが多い。字数を明示しない場合でも、解答欄を設定することにより、事実上、字数制限をすることが多い。したがって、構造図の知識すべてを盛り込むことは、不可能であり、知識の選択が必要になる。

字数以外の限定を加えない問題の場合、内容の大きく異なる様々な解答が可能になる。それが客観性の低さにつながるとされる所以でもある。しかし、逆にその性格を活かして出題する場合もあろう。解答者が、その事象について描く知識の構造の中から、どのような知識の選択をして文章を構成してくるのを見ようとする出題である。そのような問題に対する解答は、解答者が、三十年戦争という歴史的事象についてどのような質の知識でとらえているのか、あるいはどのような質の知識でとらえることがその事象をわかることだと考えているのか、三十年戦争という歴史的事象のどのような側面が重要だと考えているのか、といったことが反映された論述になる。それらは、解答者の歴史認識の質、興味・関心の在処・方向などを判定する材料となる。

2. 解答に用いる知識の限定

出題者の側に、解答者に求める一定の論述内容、すなわちその問題によって判定しようと意図している学習成果が用意されており、それに如何に近い解答をなすことができるかを評価しようとする場合、出題者の意図を解答者に明確に伝えることが、その評価の妥当性向上につながる。

問題で扱われる事象について、解答者の頭の中に成

立している様々な知識のどれを答えることをその問題が求めているのかを、出題者は明示する必要がある。求められている知識の質は、①、②、③、④のどれなのか。知識の領域は⑦、①、⑦（⑤や④があることもある）のどれなのか。

出題者の意図を解答者に明確に伝える、すなわち解答者が用いるべき知識を限定する根拠を与えることは、論述式問題の妥当性、信頼性ならびに採点の客観性の向上に不可欠である。論述式問題を開発するにあたって、解答に用いる知識を限定するには、論述式問題を構成する4つの要素、すなわち、「問題文」「リード文・資料」「指定語句」「文字数」、各々の役割が重要になる。各々の要素は、知識の質と領域をどのように限定しうるのである。「問題文」にはどのような動詞を用いるか。「リード文・資料」は付けるか、内容は、量は、形式はどうするのか。「指定語句」は付けるか、内容は、数はどうするのか。「文字数」は何文字に指定するのか。それらは、なぜそうなるのか。

「問題文」の最も基本的な構成要素は、論述対象と論述方法の指示である。それなしでは、問題として成り立たない。論述対象、論述方法に加えて、論述視点が指示される場合もある。「リード文・資料」は、問題文で指示した論述対象をより具体的に限定する役割と、証拠やより詳しい情報を提示する役割を果たしうることによって、用いるべき知識群の位置を示唆する。

問題文、リード文・資料、指定語句、文字数などの設定理由を根拠あるものにするることによって、論述式問題は、妥当性の高い有効な評価方法として活用できるものになろう。「社会認識教育における学習評価システム開発研究(Ⅱ)」において、具体的な問題とその解答を分析していく中で、これらの課題に対する答えを考察していく。

註) 本構造図は、高等学校において当該箇所の世界史授業を受けた者が、形成していることが期待されている知識を構造化したものである。具体的には、以下の教科書記述を分析することによって作成した。

- ・『新選世界史B』東京書籍 1994
- ・『世界史B』三省堂 1994
- ・『世界の歴史 世界史B』山川出版社 1994
- ・『高校世界史 世界史B』山川出版社 1995
- ・『新編高校世界史B』帝国書院 1999
- ・『詳説世界史B』山川出版社 2000